

内地

暗号電報に涙

福岡県 武田正己

私は現在八十二歳になりますが、平和で豊かな日本に住んでいることに感謝しながら、今でも自動車に乗り家業のインテリアの仕事の手伝いを致しております。

病院にかかることもなく元気で過ごすことが出来るのも、軍隊生活で病氣しながらも鍛錬されたおかげと、毎日を世のため人のためにとがんばっております。

私の家は紙箱造りが家業で、人を雇って生活してお

りました。私は長男でしたが、支那事変中でもあり一年でも早く軍隊に入隊してお国のためになりたいと、一年早く志願することを母に相談しましたところ、弟も妹もおり父親も早く死亡しておりますので、母親だけでは生活に困ることは目に見えて分かっておりますが、支那事変の重大さを理解してくれまして、志願することを許してくれました。

昭和十三（一九三八）年十二月十日、久留米歩兵第四十八連隊に志願入隊しました。

初年兵の教育は大変厳しい訓練でしたが、師団司令部が暗号教育兵を募集しておりましたので、私も中隊から選抜され、その教育を受けることになりました。各連隊からそれぞれ数人の者が師団司令部に通い、三カ月間教育を受けました後、試験が行われました。幸

いに私は合格し、五人の合格者と共に師団司令部勤務となりました。暗号の解読と暗号文作成が仕事で、中国大陸との通信業務に専念致しました。一枚の用紙でもおろそかにできず、厳しく注意を受けながら二年間を過ごしました。この間、支那事変は戦場が次々と拡大されて行きました。

私が上等兵に進級しました時、たまたま現役兵により歩兵第五十六連隊が編成され、大陸に派遣されることを知りまして、師団司令部の上官に嘆願書を出して、自分もぜひ第五十六連隊に転属をさせて下さいとお願いしましたところ、大陸で頑張ってきて来いと激励され許可していただきました。

新編成の歩兵第五十六連隊には、各連隊から門司港に集結し編成されました。そして昭和十五年八月三十一日、行先も分からないまま、五〇〇〇トン級の「高雄丸」に乗船し、南シナ海に向かいました。当時は支那事変中ですから、海上航行には全く危険性はありませんでした。

九月二十日、広東の外港黄埔港に到着、ただちに上

陸。私共は広東の近くの春州（しゅんせん）近くの警備に当たることになりました。当時は田んぼの中の寂しい田舎街で、時折便衣隊が出てきます。便衣隊は民間人の姿をしていて、日本兵を見ると突然発砲して襲うことがしばしば繰り返されるため、私達はその警備に当たりました。

民間人と親しく話し合うこともしばしばありました。漢方薬を販売する店の一家とは特に親しくなり、「シーさん、シーさん」と子供までなついてくれて楽しい日々もありました。後日私が病気のため内地に帰る時は、涙を流して見送ってくれましたことを忘れることが出来ません。今になって住所氏名を詳細にメモしておけば、日中友好親善に役に立ったのにと残念に思っております。

私は目が悪かったので射撃訓練には不向きのため銃剣術に専念しました。連隊対抗試合に選手として選ばれましたが、残念ながら小倉出身の連隊に負けました。まことに残念でなりませんでした。

春州地区では、兵隊でありながら民間服を着て民間

人になりすまし、日本兵の数が少ないと見たら襲いかかる、世に言う便衣隊が日本兵を悩ませました。この便衣隊は中国全域で日本軍を困らせたと聞いておりますが、私共は便衣隊を発見したら捕らえ銃殺しました。こうしなければ自分達が殺されるので、やむを得ない処置でした。

春州から中山に移動の命令がありました。ここで私はマラリア病にかかり倒れました。早速、野戦病院に入院しましたが、病院とは名前ばかりで、民家の床に布団が敷いてあるばかりで粗末なものでした。やがて宣撫班が来ましたので私達は交代することになりましたが、私自身も広東の兵站病院で正式の野戦病院に入院しました。この病院には軍医さんも看護婦さんもあり医療品も整っておりましたので、おかげで回復し、原隊に帰りました。

時折、故郷の母から手紙も来ました中に、「みんな元気でがんばっているから体に注意して奉公して下さい」と書いてありました。弟が久留米商業に通学して

おりましたので、弟が代筆してくれたものでしょう。もらえばなつかしくて故郷に思いを走らせました。

毎日敵前上陸の訓練を強行しておりましたところ、またまたマラリアが再発して入院することになりました。時折熱が出て震え出し、どうにも体がだるくて訓練に耐えられないので入院させていただきました。入院間もなく鉄兜を着用された橋口中隊長をはじめ五人の方が見舞いにお出で下さいました。谷川軍医から「お前の病気は医療設備の整っている病院でなければ治らない、この際内地へ帰って養生するがいい」と、橋口中尉も「ゆっくり養生して元気になって再び帰って来なさいよ」と肩をたたくて励まして下さいました。まさかこれが最後の別れになろうとは思わず「はい、有難うございます。元気になって帰って来ます」と申し上げました。

後で聞きましたが、橋口中隊長はコタバルの上陸作戦に参戦され、一番困難な場所での上陸作戦のため全員戦死であったと知り、私一人が病院に入院のため命を長らえることが出来たと考え、中隊長はじめ戦友の皆

さんに申しわけない気持ちで涙がポロポロ流れました。肩をたたいて激励して下さった中隊長は死を決して、わざわざ見舞いに来て下さったのかと思わず手を合わせご冥福をお祈り致しました。

谷川軍医のお言葉にしたがい内地に帰ることにしました。体は骨と皮で瘦せ細っておりました。マラリアの熱のため、内臓がやられてしまつて食事ものを通らない状態でした。黄埔から病院船で帰る時、前述しました春州の漢方薬店の一家が「シーさん元気で帰つて来てね」と、涙を流して見送つてくれました。

昭和十六年四月二十日、広東を出発しました。病院船は民間船を借りて赤十字の印がついているだけの貧弱なものでした。台湾の基隆の病院に入院、台北の陸軍病院に入院したりして、台湾經由で内地へ向かい、同十六年九月五日、門司港に到着しました。ただちに久留米の陸軍病院に入院致しました。さすがに医者、薬品すべてが整つておりましたので、めきめきと良くなりました。そして三カ月目の十二月五日に兵長に昇進し、歩兵第一四八連隊補充隊に編入されました。

再び師団司令部勤務となり暗号の解説に追われる日々が続きました。久留米の病院に入院中、実家が近くにありましたため二カ月くらい自宅療養してみても軍医がおっしゃいますので、お許しをいただき二カ月間自宅に帰らせていただき療養致しました。母は元気な姿を見て泣いて喜んでくれました。マラリアで骨と皮となつていたあの姿を見せずに良かったと心の中で思いながらも、中国大陸で今なお苦しい戦をしている戦友たちのことを考えますと、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

あの広い中国大陸の戦線で祖国日本のためにと、一身を投げ捨て敵軍と戦っている光景を思い浮かべ、こんなことをしていいのだろうか？ 一日も早く回復して原隊に帰り、人に負けないようにお国のために頑張らねばと、種々なことがまぶたに浮かび、居ても立つてもいられない毎日でした。早く良くなれと気持ちは焦るばかりでした。北支第三十四師団で行つた戦友達はどうか、苦勞しているだろうか悩みました。

昭和十七年四月十日、現役満期除隊になり予備役に編入されました。その折、下士官適任証書と善行証書を受領いたしました。満期除隊で母の喜びもひとしおでした。

当時、医薬品をはじめ諸物品の統制がきびしくなり、統制事務所に若い事務員が欲しいとのことで勤務することになり、三カ月くらい勤務した頃、資格を持たない者は駄目だということになり、白い徴用令状をもらいまして、昭和十七年七月から軍需工場の東洋軽金属に勤務することになりました。この会社は南方からボーキサイト、鉾石を輸入しアルミニウムを生産して、飛行機の材料等を作る工場でした。甘木の航空隊の近くにあつて、そこには軍事教練所が設置され、従業員の中から五十人ぐらいの人々に指導員五人で軍事教練の指導をしておりましたが、私も指導員の中に加わり指導に当たりました。

戦争はいよいよ激しくなりますし、私は満期になって一年有余になるのに召集令状も来ないのは、軍需工場の軍事教育の指導員だからかなと思いましたが、師

団司令部の中に連隊区司令部がありまして、その司令部に浜竹陸軍少尉がおられることを知っておりまして、「浜竹少将殿、私は満期になって二年以上になります。大東亜戦争も始まっているのに、なぜ軍隊に使っていただけないのですか」とわざわざ尋ねに行きました。浜竹少尉は「急ぐなよ、そのうちに来るよ」と言われましたが、一週間もしないうちに召集令状が来たので、催促に行ったようだと言いました。

召集令状が来ましたので、東洋軽金属を退職することになりましたが、労務課長が「あなたは徴用で勤務されたのですから正社員です。召集解除になったらまたお勤め下さいますか」と、わざわざ尋ねてくれますので、「是非勤務させて下さい」とお願いしました。おかげで終戦になるまで毎月給料を母の所に送っていただけました。母も経済的にどんなに助かったことでしょう。さすがに大企業だなと、心から感謝致しました。

昭和十九年八月一日、陸軍伍長に昇進し歩兵第一四

八連隊に入隊しましたが、偶然にも弟が十九歳で現役入隊することになりました。戦争が激しくなり二十歳入隊が十九歳入隊に繰り上げられたからです。

兄弟同時に召集、入隊することになり、母の心中察するに余りあるものがあり、私は複雑な気持ちで第一四八連隊に、弟は福岡第二十四連隊に満州派遣要員として、それぞれ入隊しました。母の便りで弟が門司に待機中とのが分かり、昼間面会に行けないので衛兵司令の許可をいただき面会に行きました。連隊でもどこの中隊か分かりませんので連隊副官にお願ひし、無事に面会することが出来ました。お互いに励まし合って別れましたが、これが最後の別れになりました。弟は満州から南方に移動中戦死したからです。

広東におります時、時折り来ます母の手紙は弟が代筆してくれておったのと思ひ起こし、戦争の悲劇をしみじみと感じました。福岡陸軍軍需輸送統制部に転属を命ぜられ、庶務課長の太尉から赴任先が広島と鹿児島とあるが、どちらを希望するかと尋ねられましたので、鹿児島にして下さいとお願ひし、鹿児島輸送統

制部に赴任致しました。輸送統制部は、鹿児島築港の所にありました。鹿児島有限会社三階の一室を借りて事務所を置いてありました。

仕事は南方向けの軍需品をはじめ種々の資材を船に積み込む仕事で、責任者はマップニ輸送広島の大会社の予備役の大將でした。

「〇〇丸」に何を何個と指揮して積み込ませる。私たちはそれを暗号に組み発信する業務でした。昼夜問わず三人が交代で輸送連絡をとりました。民家に下宿し毎日通勤しましたので、六十円の給料が少し残ると郵便局に貯金し、その中から母に送金しておりました。

暗号通信も楽なものではありませんでした。ちょっと聞き違えると変な文章になり、作戦上大変な結果になりますので、暗号の解説文に間違いはないか、みんなで相談して確認し合いました。

昭和十九年十月になると、米軍の航空機が東海地区をはじめ、九州の長崎、佐世保、大村の海軍基地の爆

撃、十一月になると東京、浜松、名古屋の空爆をはじめ、空軍基地、軍需工場のある都市に空爆と次々情報は飛び込んでくるし、日本はどうなるのかと、いささか心配になりながら与えられた暗号電報の発信、受信、解読と昼夜を分けず一生懸命がんばりました。

昭和二十年になると、B29爆撃機、グラマン戦闘機の空襲が全国各地ではじまり私達の仕事も多忙を極めました。

昭和二十年三月十五日、大本営第二通信隊に転属の命を受け、鹿屋に移動することになっておりました。折も折、三月十七日、硫黄島玉砕の報が飛び込んできました。この時ほど戦争に敗れることの惨めさを感じたことはありませんでした。「重要書類すべてを燃やし処分せり、大日本帝国万歳！」の報に愕然としました。一通の電報に託された二万余の戦友の無念さをしのび、思わず涙が溢れ出しました。手を合わせ冥福を祈りました。

十八日、桜島方面からグラマンが飛来してきて銃撃を浴びせるとともに、焼夷弾投下、油脂爆弾投下、鹿

児島の街は火の海と化しました。私達は鹿屋に移動するため天文館の通りに近い宿に集結しておりましたが、爆撃の雨に民間人もつぎつぎと吹き飛ばされ、家の前に掘っていた防空壕に逃げ込もうとして親子ともども焼死、私は急いで布団に水をかけ頭からかぶって、私について来いと照国神社に向かって走りました。家は倒れ「助けて！」と叫ぶ声、まるで地獄の様相でした。

照国神社には海軍の人々も逃げて来ていました。気の毒だったのは、憲兵分遣隊長が挨拶回りして隊舎に入ろうとした時、爆弾の直撃を受け死亡された事でした。先刻挨拶にお出になったのにと、人の命のはかなさを感じました。

敵機の去った後の悲惨さ、その臭いは何とも言えない臭いで吐き気をもよおしました。桜島から漁船に積んで握り飯が運ばれ、奉公隊の人達が分配して下さり、まさに青天の霹靂とはこのことで、生地獄でした。

三月二十八日には鹿屋市、鹿児島市に一三〇機が飛

来し、追い打ちをかけるように爆弾の雨、私達は城山の穴の中で暗号通信を続け、鹿屋への移動は中止になりました。その後も四月十六日、十八日と爆撃を受け、鹿児島市は完全に壊滅されてしまいました。戦争は勝たなければならない、負けた哀れな姿。鹿児島だけではない、大陸でも、南方でも、日本国内でも多くの方々が死んでいかれました。なんと悲惨なことであるるか、鹿児島には鹿屋海軍特攻基地や知覧陸軍特攻基地があるため、米軍は徹底的に爆撃を続けるであろうと予想され、作戦上の都合で大本営第二通信隊は、福岡県筑紫郡山家町の本部へ移動することになりました。

第二通信隊本部は山家の山に穴を掘り、立派な設備を整えた場所になりましたが、米軍の空爆や南方から、中国大陸からと敗戦の報が次々と報告されますし、八月六日、広島への原爆投下、次いで九日、長崎へ原爆投下と、悲しい情報に泣くまいと思いながらも、無念の涙が溢れ出てきます。部内も刻々と慌ただしさが増し騒然となりました。

八月十五日、洞窟内で初めて天皇陛下の御声の終戦の詔勅を聞き、敗戦という現実が無念の涙がとめどなく溢れ出しました。いや、みんなが男泣きに泣きました。上司の命令により器材一切処分し、昭和二十年九月二十日、召集解除となりました。

いつの日にかみんなの力で立派な日本を築き上げようと、泣きながらお互い手を握り合って二度と戦争の悲劇を繰り返すまいと誓い合い別れました。

九月二十日、なつかしい家に帰りましたが、一人の弟を戦死させた淋しさは忘れることは出来ません。しかし平和な日本の礎となられた多くの戦死者、民間人に心から感謝し、毎日毎日を少しでも世のため、人のためになればと老いの身に鞭打ちがなばっております。

暗号に 託した玉碎 ただ涙